

心理効果を利用する

色はイメージを喚起するだけでなく、実際に人の心理や影響を与える力を持っています。この効果をうまく活用することで、読み手の心に変化を起こさせるデザインをつくることができます。

代表的な心理効果

赤の効果



元気な色の代表格。食欲を増進させたり、興奮させる作用があります。

黄・オレンジの効果

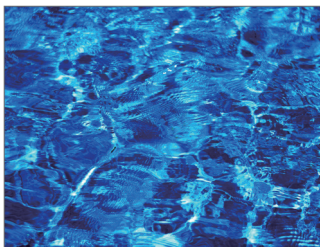


明るい気を盛り上げる色。黄は胃の、オレンジは腸への消化作用も持ちます。

人は無意識下で色の影響を受けます。赤い部屋では、たとえ目をつむっていても体温や心拍数、血圧が上昇するとの実験結果もあります。意識して見ることで、より顕著にその効果は身体に現れます。日々のファッションや部屋のカラーコーディネートにも、色の心理効果を利用してみましょう。

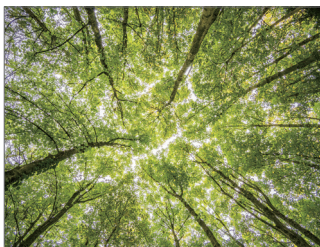
- ☒ 色が人の心理に影響を与える効果を知り、デザインに生かす
- ☒ 読み手の心理に訴えかけるデザインをつくることが可能に

青の効果



鎮静作用を持つ色。入眠効果や、食欲を減退させる効果もあります。

緑の効果

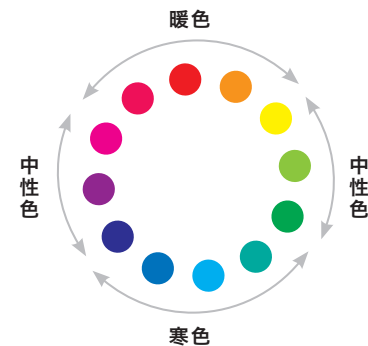


目の疲れを緩和する癒しの色。リラックス・ヒーリング効果があります。

色の心理効果を知る

右の12色相環は、大きく暖色・寒色・中性色に分けることができます。暖色はその名のとおり暖かさを感じさせて気分を高揚させ、心拍数や血圧を上げる効果があります。反対に寒色は冷たさを感じさせて気分を落ち着かせる作用があります。その効果をもっとも発揮するのが暖色では赤、寒色では青になり、色相が変化するにつれ効果も穏やかになっていきます。

中性色は暖かさや冷たさは感じず、ニュートラルでバランスのとれた状態をイメージさせます。自然の色と結びつきやすい緑は、平和を象徴することも多くあります。紫は赤と青の中間として、どちらの性質も受け継いでおり、感性を高めてインスピレーションを得やすい色とされています。



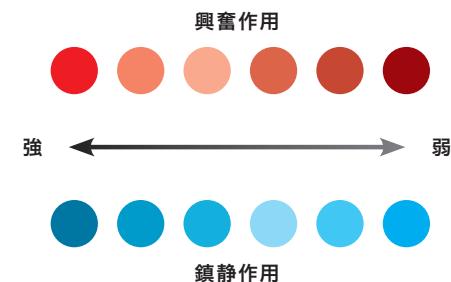
赤い部屋に入ると、無意識のうちに体温や心拍数、血圧が上昇します。



青い皿ダイエットは、寒色の食欲減退効果を利用したものです。

トーンで効果を調整

同じ色相の配色でも、トーンに変化をつけることで異なる心理効果を与えることができます。例えば暖色のなかでも、彩度を落とした赤には、鮮やかな赤ほどの興奮作用はありません。寒色の青は反対に、彩度を落とした色のほうが鎮静作用が強く発揮されます。色相とトーンの組み合わせで効果の強さをコントロールし、適した配色を探りましょう。



MEMO

美味しそうな色に補正する

色による心理効果は、ビジュアル素材を補正する際にも活用できます。右のビザの例では背景の暖色により食欲を刺激していますが、ビジュアルが少し弱い印象です。Photoshopの【カラーバランス】で赤みを足して青みを減らすことで、背景とよりなじんだ美味しそうなビザになります。スライダーの微調整で不自然でない色に整えましょう。

